

感動と悲しみが 喚起される場面における 涙の個人差と パーソナリティの関連¹⁾

小林 諒子*・堀内 聡*

Individual Differences in Tears and Personality in a Situation that Moves and Saddens One

Akiko KOBAYASHI* and Satoshi HORIUCHI*

This study investigated the associations between individual differences in tears and personality in a situation that moves and saddens one. Each participant viewed a moving picture that was approximately 5.5 minutes long and scored their feelings and appearance of tears during the clip. They also completed a questionnaire on big five personality types. Stronger feelings of being moved and sadness were induced when compared with other feelings when viewing. A regression analysis with the five personality traits and gender as independent variables and appearance of tears as the dependent variable indicated that increased openness was associated with more intense crying.

key words : crying proneness, emotional tears, being moved

問題と目的

涙活とは、意図的に涙を流すことで緊張を和らげることを指す(寺井・有田, 2013)。特に、感動と悲しみという感情を経験しながら涙を流す場合、「すっきりした」といった感情が生じやすい(白井・加藤, 2017)。感動とは強い共感と呼ぶ場面や非常に稀な場面において生じ、心の奥底に響くようなとても強い情動である(戸梶, 1998)。そこで、感動と悲しみが喚起される場面における流涙の個人差を理解することは、涙活という現象を理解する上で重要である。

これまで、感動と悲しみが喚起される場面における泣きやすさとパーソナリティの関連は直接的には検討されてこなかった。泣きやすさとパーソナリティの関連を検討したRotenberg, Bylsma, Wolvin, & Vingerhoets (2008) は、泣きや

すさに最も関連するパーソナリティは神経症傾向(ネガティブな感情の経験しやすさ)であることを示している。しかし、泣く場面が必ずしも感動と悲しみが喚起される場面ではなく、それ以外の感情を経験した場面や感情を経験する想像上の場面(例: 葬儀, 失望する場面)などが含まれていた。本研究では、感動と悲しみが喚起される場面における涙の個人差とパーソナリティの関連を探索的に検討する。

方 法

参加者 研究参加者は大学生49名(女性43名, 平均年齢20.3歳, $SD=1.34$)であった。このうち、データの不備が認められた6名を除外し、43名を分析対象とした(男性5名, 女性38名, 平均年齢20.2歳, $SD=1.34$)。

刺激 インターネットサイトYouTube®(YouTube社)に公開されている鉄拳公式チャンネルの「鉄拳『約束』」を利用した。この作品は約5分30秒であり、父、母、息子が登場する。父にプレゼントされたおもちゃに夢中になった息子がフォークリフトに轢かれそうになるが、父は息子を守ろうとして命を落とす。作品では、残された母と息子の苦悩と葛藤が描かれる。息子は、亡くなる直前に父と交わした約束を思い出し、前を向いて歩みだすという展開になっている。感動を伴う涙を誘うテーマには達成・克服と家族愛がある(戸梶, 2007)。「鉄拳『約束』」は、父の死を克服し約束を果たす点が達成・克服、母と息子の人間模様が描かれている点が家族愛に該当するため、感動が喚起されると考えた。また、「父の死」がターニングポイントとなっており、悲しみも喚起されることを想定した。

調査項目 (1) **感情** 喜び、悲しみ、怒り、感動、悔しさについて、どの程度感じたか回答を求めた(白井・加藤, 2017)。「映像を視聴した時、以下の感情をどの程度感じましたか」という指示に対して、「1. 全く感じなかった」から「7. 非常に感じた」の7件法で回答を求めた。得点が高いほど、それぞれの感情が顕著であることを示す。(2) **流涙** 流涙は、「映像を視聴している最中、あなたはどのくらい泣きましたか」(高路他, 2015)という項目によって測定した。回答は0から6までの7件法で行ってもらった。数値の意味は、0が「泣いていない」、2が「少し泣いた」、4が「泣いた」、6が「激しく泣いた」であった。(3) **パーソナリティ** 日本版NEO-FFI(下仲・中里・権藤・高山, 1999)を使用した。この尺度の因子は、神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性の5つである。回答は、「4. 非常にそうだ」から「0. 全くそうでない」の5件法で求めた。得点が高いほどその傾向が高い。

手続き 2018年11月に心理学実験室を利用して研究を行った。死に関する描写があり、感動したり、悲しくなったり、泣いたりする可能性がある映像の視聴を依頼すること、映像視聴後には質問紙への回答を依頼すること、研究への参

¹⁾ 本研究は、平成30年度岩手県立大学社会福祉学部卒業論文を加筆修正したものである。

* 岩手県立大学社会福祉学部

Faculty of Social Welfare, Iwate Prefectural University,
152-52, Sugo, Takizawa, Iwate 020-0693 Japan.

Table 1 パーソナリティと流涙の関連

変数	B	t
開放性 (除外された変数)	.39	2.70**
神経症傾向	.03	0.20
外向性	.05	0.36
調和性	.17	1.17
誠実性	-.11	-0.78
性別 (男性=1, 女性=0)	.02	0.14

Note : $F(5, 157) = 10.49^{**}$

** $p < .01$

加は自由意思にもとづくこと、不参加による不利益はないこと、個人情報保護されること、結果を学会などで公表される可能性があることを書面と口頭で十分に説明し、書面にて同意を得た。実験中は臨床心理士の資格を持つ大学教員が不測の事態に備えて待機した（映像による不調を訴えた参加者はいなかった）。映像をデスクトップPC上で視聴した後、感情、流涙、パーソナリティに関する調査票への回答を依頼した。

結 果

まず、動画視聴によって感動と悲しみが喚起したか否かを検討した。悲しみ ($M=5.7$) と感動 ($M=5.9$) は、中間の値である4よりも高かった。他方で、喜び ($M=4.4$)、悔しさ ($M=3.5$)、および怒り ($M=2.1$) は中間の値である4と同程度か、それより低かった。感情の種類を独立変数とする対応のある1要因分散分析の結果、有意な主効果が認められた ($F(2.96, 124.10) = 54.54, p < .01$)。Bonferroniによる多重比較の結果、喜び、怒り、および悔しさと比較して、悲しみと感動の得点は有意に高かった (すべて $p < .01$)。怒りと比較して、喜びと悔しさの得点は有意に高かった (いずれも $p < .01$)。

次に、流涙と感動および悲しみの関連を検討した。相関分析の結果、流涙と感動の間には有意な正の相関 ($r = .39, p < .05$) が認められた。他方、流涙と悲しみ ($r = .27, p = .08$) との間には有意な相関は認められなかった。

最後に、流涙とパーソナリティの関連を検討した。流涙評定の平均と標準偏差は、1.5と1.56であった。Table 1に流涙を従属変数、パーソナリティと性別を独立変数とするステップワイズ法による重回帰分析の結果を示す。自由度調整済みの R^2 値は、.13であった。開放性が高いほど、流涙が顕著であった ($\beta = .39, p < .01$)。これに対して、流涙は、神経症傾向 ($\beta = .03, ns$)、外向性 ($\beta = .05, ns$)、調和性 ($\beta = .17, ns$)、誠実性 ($\beta = -.11, ns$)、および性別 ($\beta = .02, ns$) とは有意な関連を示さなかった。

考 察

本研究では、感動と悲しみが喚起される場面における涙の個人差とパーソナリティの関連を探索的に検討した。本研究

の結果、開放性が高いほど、感動と悲しみが喚起される場面における涙の量が顕著である一方、神経症傾向、外向性、調和性、および誠実性は関連しないことが示された。開放性の高い人は、そうでない人と比較して、想像性や内的感受性が強い (下仲他, 1999) ため、登場人物がどのような状況に置かれており、どのような気持ちになっているのかを容易に想像ができるものと考えられる。そのため、悲しくて泣いている、嬉しくて泣いている登場人物の状況を鋭く感じ取ることによって本人も豊かな情動を経験し、泣きが生じやすい可能性が考えられる。

この結果は、泣きやすさに最も関連するパーソナリティは神経症傾向であるという Rottenberg et al. (2008) の知見と一致しない。Rottenberg et al. (2008) と本研究では、本研究は感動と悲しみを喚起する動画を実験室で視聴する場面を扱っているが、Rottenberg et al. (2008) は仮定された多様な状況における泣きを扱っているという違いがある。このように泣きが生じる状況、泣きやすさの評価方法が異なるため、結果が相違した理由を明らかにすることはできなかった。その理由については今後検討する必要がある。

また、本研究で利用した動画は「少し泣いた」よりも軽微な流涙を喚起していた。そのため、本研究は泣いた人ではなく、思わず目頭が熱くなり、泣きそうになった人のパーソナリティを探索的に検証したともいえる。今後はより強く流涙を喚起する刺激でも同様の知見が得られることを確認する必要がある。

引用文献

- 高路奈保・中野友佳里・満居愛美・上利尚子・有安絵理名・吉村耕一 2015 情動性の涙のストレス緩和作用に関する研究 *ストレス科学研究*, 30, 138-144.
- Rottenberg, J., Bylsma, L. M., Wolvin, V. & Vingerhoets, A. J. J. M. 2008 Tears of sorrow, tears of joy: An individual differences approach to crying in Dutch females. *Personality and Individual Differences*, 45, 367-372.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 1999『日本版NEO-PI-R, NEO-FFI 使用マニュアル』東京心理
- 白井真理子・加藤樹里 2017 人が涙を流すとき—関連感情と気分変化— *感情心理学研究*, 25 (Supplement), 31.
- 寺井広樹・有田秀穂 2013『涙活でストレスを流す方法』主婦の友社
- 戸梶亜紀彦 1998 感動に関する基礎研究 (2) 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 30.
- 戸梶亜紀彦 2007 感動のツボと自身の経験との関連性について *日本心理学会第71回大会論文集*, 22.

(受稿: 2021.1.2; 受理: 2021.6.22)